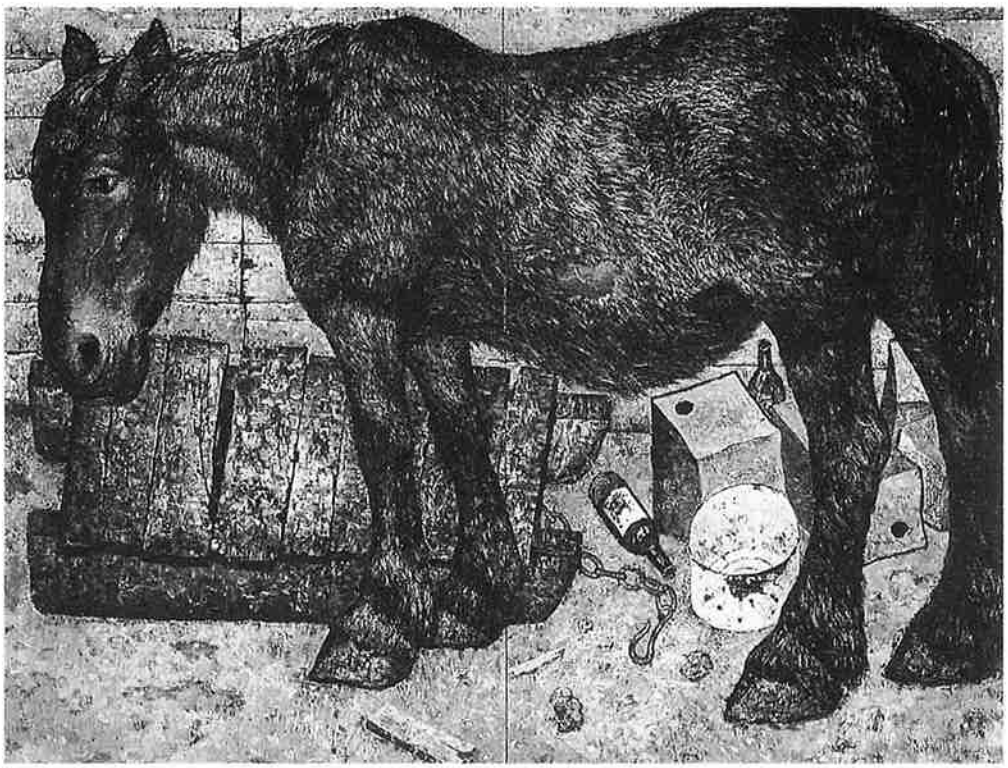
1998.3.31
No.8

KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

# 記念館だより

神田日勝記念館
〒081-0292　北海道河東郡鹿追町東町3丁目2　TEL 01566-6-1555



馬／1965年
油彩・ベニア.144.0×183.3

1965年から66年にかけて、『馬』『死馬』『開拓の馬』という馬をモチーフにした作品が続けて制作されました。『馬』は第20回全道展に出品、さらに第33回独立展に入選、新人室に陳列されています。

画面いっぱいに描かれた農耕馬は、ペインティングナイフによって一本一本の毛並みが克明に刻み込まれ、擦り切れた胴引きの跡の描写がなされるなど、細部にいたるまで表現されつくされ、日勝の初期克明描写期を代表する作品となっています。

「日勝の描く馬は、どれも体高は低いが頭と足が大きく太い。蹄も大きい。人間を描いてもそれは同じである。農耕のためには人間も馬も、強い手や足を備えなければならなかった。日勝は農業というものをそんなふうに原初的にとらえていたに違いない」（高橋揆一郎『未完の馬』）

# 神田日勝のふるさと
# 練馬区立美術館所蔵作品展
## 1月28日(水)―3月22日(日)

東京都練馬区立美術館で二月から開催される「ねりまの美術'98　神田日勝　深井克美展」に、神田日勝記念館所蔵の代表作ほぼ全点が展示されることになり、この期間練馬区立美術館の全面協力を得て「神田日勝のふるさと―練馬区立美術館所蔵作品展」が記念館一階展示室で開催された。

練馬区立美術館は、単に美術作品を保管・展示する施設としてばかりではなく、区民が美術に対する理解を深め、発展させ、さらに主体的に参加できる開かれた美術館として、昭和六十年十月板橋・渋谷に続く東京都内三番目の区立美術館として開館した。練馬区関連の美術作品のみならず、幅広い視野で日本の近・現代の優れた作品・資料を収集し、その方針に添った企画展を開催し、多様な美術状況の理解を深めている。また区民ギャラリーの開放、子どもワークショップ・絵画の基礎実技講座の開催等、教育普及事業にも積極的に取り組んでいる美術館である。

今回は千点を越える練馬区立美術館の所蔵作品の中から、文化勲章受章者奥田元宋・鳥海青児・鳥居敏文・野見山暁治等十作家の日本画・洋画併せて二十三点が選抜された。展示室中央に掲げられた奥田元宋の「妙義赤嶂」を中心に、北国の漁村をテーマに波が覆い被さるような圧倒的迫真力をもつ小野具定「冬ざれ」、リアリズム的作風の大沢昌助の初期の作品「釘をうつ少年」、清楚な色感による叙情的画風の福井爽人「笛の夜」など、初めて日勝以外の著名な画家の作品が壁面を彩った。

一月二十七日のオープニングでは、関係者による内観が行われたあと、記念館ロビーを会場にミニパーティが開催され、列席した練馬区立美術館の土方明司学芸員を囲んで作家や作品に関する話題でひとときを過ごした。

会期中の入館者は二千二百人余。日本の近・現代の優れた作品を実見できるまたとない機会ということもあり、学校単位の観覧もおこなわれるなど、町内外の美術愛好者には意義のある展覧会となった。

なお、二階展示室では、この会期中日勝作品が不在となる事態を避けるために、近郊の個人が所蔵している風景画を集成し、「個人所蔵作品を中心とした神田日勝の風景画―農村風景」を開催した。神田日勝の作品調査の過程で判明した個人所蔵家の作品の中から「雪の農場」「黄昏の農場」等風景画十六点を展示。会場には、澄んだ空、雪に立つサイロ、ポプラ、収穫時の風景などを通して、代表作とはまた違った詩情あふれる世界が現出。遺作展以来ほとんど一般に公開されていない作品も多く、来館した日勝ファンには従前と趣を異にした世界を提供するものとなった。

## 奥田　元宋（おくだ　げんそう）

妙義赤嶂
1989年（平成元年）

1912(明治45)年広島県生まれ。本名厳三。児玉希望に師事する。1936年文展鑑査展で初入選。1949年第5回日展で特選を受賞。1962年第5回新日展で文部大臣賞を受賞。翌年日本芸術院賞を受賞する。1973年日本芸術院会員となる。歌人としても優れ、1981年宮中歌会始の召人となり、同年文化功労者となる。1984年文化勲章を受章。表現主義的な画風から近年は新曖昧派と評されるように自然の情趣を模糊とした筆致で描き、現代の風景画に新境地を開拓した。

果物かごを持つ少女
1964年（昭和39年）

## 鳥居　敏文（とりい　としぶみ）

1908(明治41)年新潟県村上市生まれ。東京外国語学校ドイツ語科卒業。
1933年よりパリに滞在し油彩画を学ぶ。林武アトリエにも通う。1937年より独立展に入選。1946年独立美術協会の会員となる。この頃から練馬に在住。写実にねざした穏健な作風を追求している。

釘をうつ少年
1949年（昭和24年）

## 大沢　昌助（おおさわ　しょうすけ）

1903(明治36)年東京生まれ。1928年東京美術学校西洋画科を卒業。翌年二科展に入選。1943年二科会会員となる。1952年サロン・ド・メに招待出品。1970年サンパウロ・ビエンナーレ展に出品。初期のリアリズム的な作風から戦後は抽象画風に取り組み、さらに近年に至り大沢流とも呼べる潤達自在な画境を示した。1997年没。

ある部落
1967年（昭和42年）

## 小野　具定（おの　ぐてい）

1917(大正3)年山口県生まれ、本名具定(ともさだ)。1914年東京美術学校日本画卒業。1922年児玉希望に入門。1929年以降新制作協会展に出品する。1942年第31回新制作展では文部省買上げ、1946年第1回山種美術館賞で受賞。1949年創画会結成以後は、会員として同会に出品。また日本国際美術展、現代日本美術展にも出品する。東北や北海道の冬の漁村を題材に厳しい構成とモノトーンによる風景画的なイメージの世界を展開する。

笛の夜
1982年（昭和57年）

## 福井　爽人（ふくい　さわと）

1937(昭和12)年旭川生まれ。1967年東京芸術大学大学院修士課程を修了。前年より練馬区に在住。在学中日本美術院展に初入選。以後院展を中心に活躍する。1991年より東京芸術大学教授に就任。同年第76回院展で内閣総理大臣賞を受賞。清楚な色感による叙情的画風に定評がある。

## 鳥海　青児（ちょうかい　せいじ）

1902（明治35）年神奈川平塚市生まれ。開西大学在学中の1924年、第2回春陽会に入選。三岸好太郎らと麗人会を結成。岸田劉生とも親交し、冬菜の号を受ける。1930年渡欧。絵具に砂を混ぜ合わせて描くなど、作風は重厚な絵肌と色調、堅固なフォルムを特徴とする。1943年春陽会を離れ独立美術協会に参加。1956年毎日美術賞を受賞。1972年没。

アルジェリア風景（ブッサダ）
1932年（昭和7年）

ねりまの美術'98

## 神田日勝　深井克美展

2月7日(土)―3月15日(日)

函館で生まれ練馬で生涯を閉じた深井克美、練馬で生まれ鹿追で没した神田日勝。ともに練馬と北海道を共通項とする夭折の画家の画業を検証する「ねりまの美術'98」。記念館から代表作のほぼ全点を出品、道立近代美術館・帯広美術館の作品と併せ、日勝の全貌を示す二十年振りの東京展となった。オープニングには遺族を始め関係者が出席、また記念館友の会による練馬区立美術館見学ツアーも二月末に実施された。

## 子どもワークショップ冬

1月14日　鹿追町民ホール

冬休みのマジカルアートは立体造形「フェルトモビール」の制作に二十三名の児童生徒が挑戦。池田町スピナーズファームタナカの田中忠二さんを講師に四卓を囲んで、染色された羊毛を素材に使ってマンボウ等の作品を完成させた。その後ワークシートを用いた記念館での作品鑑賞により、神田日勝の世界について学芸員より説明を受けた。

## 芸術鑑賞バスツアー

11月15・16日　木田金次郎美術館

木田金次郎美術館と共同で、互いの所蔵作品を交換、個人名を関する美術館の連携の構築を計った「木田金次郎と神田日勝展」。記念館友の会を中心に、この展覧会を見学する「芸術鑑賞バスツアー」が企画され、十八名が参加。木田美術館で日勝作品を鑑賞し、さらに荒井記念館と北海道立近代美術館でも企画展を観覧した。

## こども絵画教室

1月12・13・16日　鹿追町民ホール

初年度より参加の三名を含む小学生五名が受講。通明小学校長の出村英和先生を講師に静物画を描いた。第一日目は下書きで構図を決め、絵の具の使い方を学び軽く着色。第二日目は色に変化や陰影をつけながら対象物をしっかりと描く。最終日は作品を完成させるという流れで、それぞれの油彩画の世界にふれる課程を終了した。

## 劇団シアターⅡ わたしの神田日勝

11月5日　札幌市

北海道文化財団の主催により、かでる2・7で開催されたパフォーミング・アーツ・in北海道1997。その地域芸術文化劇場の一環として、神田ミサ子原作「わたしの神田日勝」が劇団シアターⅡにより上演された。立錐の余地がない程観客があふれる会場で、神田日勝の生き方が二時間余にわたり熱演された。この作品は今冬鹿追でも上演を予定。

## 子どもワークショップ春

3月31日　鹿追町民ホール

いろいろな素材を用いた工作を中心に実施されているワークショップ。春休みは帯広市教育研究会美術図工部会に所属、児童会館図画工作クラブ講師も勤めた成瀬登さんの指導でペーパーアートに挑戦。紙と友達ー紙の楽しい使い方に二十名の小学生たちがはさみ・カッターを駆使して奮闘、時間を超過しながらも寅などの作品を完成させた。

## 絵画教室（12月3・10・17日 3月6・12・19日）

神田日勝記念館

十二月の絵画教室は、十月開講の教室の受講者を対象に、一作の制作だけで終わらせたくないという意図のもと、補講として実施された。受講生は四名。三回コースとして開催。

三月の教室には六名が参加、初めて絵筆を握るという人も受講し、静物画の制作に取り組んだ。

講師はいずれも通明小学校長の出村英和先生。

# 感想ノートより……⑥

9/24
室内風景」と「馬」の絵の人という イメージが強かったのですが、今日、然別湖へ向う途中、たまたま寄った所のはずが とても感動してしまいました。
繊細な面と、明るい躍動感にあふれる大きな情熱との両方に出会い、驚いています。

11/6. 友人と訪ねてきました。神田日勝の人生と絵に触れ友人も私同様、心打つものを感じた様です。
絶筆の馬の目は変らずに、やさしい目まなざしで私達をみつめている様です。帯広市 K.F.

11/8(土)
来て良かった。本物を見るのは、初めて。心にガーンと語りかけてくる様な作品。
死馬リが良かった。死んではいるが、まだ暖りがある様な、毛並、馬を愛しむ心が伝わってくる作品。

9. 11. 24.
馬の絵・特に死馬にひかれました。農耕にこき使われて、毛並がすり切れた跡が描かれてなく、穏やかな表顔で横たわっている様がかえって悲しく、死によって、やっと得られた安息を、祝福するかのように、深い動こくと共に、小さな安ぎ感をも、感じました。
釧路 M.N.

3/1 新得町に住んで一年。ずっと訪れたいと思っていました。今日しかないと腰痛をおしてやって来ました。思っていたより優しい画風に心ひかれました。
代表作が東京に送られていたので鑑賞できなくてちょっと残念でしたが、日勝のやさしい顔写真が見れただけでも良かったと思います。
春からは大阪に帰ることとなりましたが必ずまた来ようと思ってます。
鹿追町は日勝のやさしい目のようないい町ですね。

3/22(日)
今日はじめて鹿追に来ました。
練馬区立美術館「所蔵作品展」の中の「笛の夜」がとても印象に残りました。遠くからも近くからもどの位置からみても、とても良い作品だと思いました。
又、この絵に会えることをいのって。

# 展覧会事業

## 春季平原社展移動展

3月10日～15日　鹿追町民ホール

春季平原社移動展が、鹿追町民ホールに巡回、とかちプラザに出品された作品の中から、陶芸・彫刻等を除く四十余点が展示された。この移動展は、平成五年の町民ホールオープン記念事業に続く二度目の開催。

十勝画壇の中心的美術団体の展覧会とあって、会場には多くの町内外の美術愛好家が観覧に訪れていた。

なおこの移動展は、鹿追町の後大樹町に巡回。

## 馬の絵作品展移動展

12月2日～14日　とかちプラザ

馬の絵作品展の入賞作品の移動展が、とかちプラザを会場に開催された。従来は本展終了後、幕別町の十勝教育研修センターでの移動展を実施していたが、今年度はより多くの方々にこの作品展の魅力を認識してもらうことを主眼に、幕別の後に帯広の中心地での移動展を企画した。本年度の入賞作品に、過年度の冠賞作品も併せて展示し、多くの来場者の眼を引いていた。

## 入館者25万人達成!!

五年目で入館者二十五万人を達成。十一月二十五日午後三時、元の職場の同僚八人と連れ立って入場した札幌市厚別区在住の主婦・小松信子さんが達成者となった。小松さんは平成六年にご主人と一緒に記念館を見学されたことがあり、今回が二度目の来館。高尾武教育長から記念品を贈られ、仲間の祝福の拍手を受けていた。

## ちょっとINFORMATION

『神田日勝 深井克美 展』
（練馬区立美術館）
「ねりまの美術'98」図録。代表作が収録され、鈴木正實・土方明司両氏の日勝論・文献目録等を掲載

『美術館感傷旅行』
（海野弘／マガジンハウス）
小さな個人美術館45館を巡る旅。「馬の時代の画家」として神田日勝の作品とその時代を語る。現代美術の流れの中で夭折の画家の位置を探る

『北海道立近代美術館コレクション100選』
（北海道立近代美術館）
北海道道立近代美術館開館20周年を記念して3,000点に及ぶ所蔵作品より厳選した作品集。「室内風景」を収録

『20世紀物故洋画家事典』
（美術年鑑社）
20世紀を代表する日本の洋画家2,000人を収録。十勝からは他に能勢真実・坂本直行が掲載

『友だちじゃないか』
（上條さなえ／小学館）
5年生の夏休みの旅行で訪れた神田日勝記念館での「半欠けの馬」との出会いから、物語ははじまる。